障がい者について知ろう

学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校三年 相澤 凜

「障がい者」と聞いて、どのようなイメージを抱くでしょうか。なかには「障がい者」というだけで差別しようとする人がいるかもしれません。「可哀想」「大変そう」など感情や思いを抱く方もいるかもしれません。しかし、そういった感情や思いは、一歩間違えると、基本的人権の侵害となるかもしれません。

私の兄は、先天性サイトメガロウイルス感染症という感染症のために生まれつき難聴の障がい者です。私が物心ついた頃は補聴器を使っていました。兄は、小学生になったとき、右耳は全く聞こえなくなり、左耳は補聴器で何とか生活できる程度になってしまいました。

最近では、補聴器をワイヤレスイヤホンと勘違いされ、音楽を聴いていると誤解されてしまう理不尽な対応を受けることがあったそうです。このように障がい者の人権問題には周囲の無理解が大きく関係しており、こういった問題を解決するには、周囲がそれぞれの障がいについていろいろ知る必要があると思います。

補聴器は、周囲の環境によっては音が反響して聞き取りにくくなってしまうため、兄は大半、人の口の動きを見て視覚情報も駆使して相手の話している内容を理解しています。この兄が、昨年の初春から日本国内で広がり始めたコロナウイルス感染症を予防するためにマスク着用を余儀なくされている現状に苦しんでいます。マスクによって人の口の動きが見えなくなったため、目から情報収集することができなくなってしまいました。その結果、人の表情や顔色から相手の伝えたい情報を汲み取ることが難しくなり、人とのコミュニケーションの幅がとても狭まってしまったそうです。家族のなかでは、兄の左側に座ることなどを心がけたことで対応できましたが、現在、高校二年生の兄は、コロナウイルス感染症が広がり始めた高校入学当初、初めての環境、マスクをした初めて会う人達のなかでコミュニケーションを上手くとることができず、不安でいっぱいだったそうです。校内放送や英語のリスニングの際などは音が反響して聞き取りにくく大変で、困るそうです。しかし、学校では、周囲からサポートしていただき、前から二列目の席で周囲の動きを察知しやすくしてもらったり、授業で話す先生や友人に「ロジャー」という補聴器に声を送信

して話し手の声を聴きやすくする装置を使ってもらったりするなどの配慮をしていただき、ゆっくりと環境になじむことができるようになってきたそうです。周囲のサポートのおかげもあって兄は「生まれつき聞こえにくいことは自分の個性だ」と難聴を受け入れることができ、周囲に感謝しつつ、できるだけ周囲に迷惑や負担をかけまい、と頑張ることができています。

障がい者といっても程度は様々です。兄のように聴覚障がいがあっても話すことができる人もいれば、全く音が聞こえず手話で会話する人もいるなど、障がいの程度は人によって違います。したがって、全員同じ接し方をするのではなく、その人に合った個別の対応をすることが大切だと思います。腫れ物に触れるように過剰な扱いをしないことも大切だと考えます。

こういった対応ができるようになるためには、それぞれの障がいについて知る必要があります。多くの人に知ってもらうために自分にできることは何か、見つけていきたいと思っています。